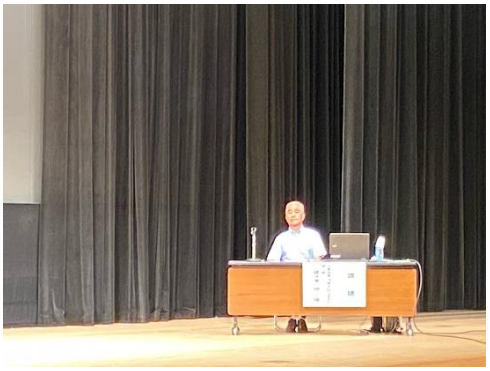
開催地名：岐阜県輪之内町	
開催日時	令和４年９月４日（日）　　９：15 ～ 11：00
開催場所	輪之内町文化会館
語り部	佐々木　守　　（岩手県釜石市）
参加者	輪之内町役場職員　126 名
開催経緯	本町は長良川・揖斐川の２つの河川に挟まれた位置にあり、水とともに発展してきた地域である反面、「洪水常襲地域」とも言われ、洪水のリスクが非常に高く、水害に悩まされてきた地域である。また、地盤についても沖積層の堆積が厚く、非常に軟弱であることから、南海トラフや断層系の大地震が発生した際は甚大な被害が発生することが予見されている。 幸いなことに、直近では大規模な災害は発生していないが、その反面、経験不足による役場職員の災害対応に係るノウハウが不足している。災害発生時の動きを各種計画・マニュアル等に定め、対応することとしているが、実際に災害が発生した時に対応できるのか不安があるため、語り部の講演を実施して職員の準備と心構えの一助としたい。
内容	（１）はじめに 三陸沖、深さ24キロメートルを震源とするマグニチュード9.0の地震による津波が、岩手県釜石市を襲った。釜石市全体で 888 人が犠牲となり、152 人が未だ行方不明となっている。私は震災当時、釜石市の防災課長を務めていた。釜石は津波の常襲地区であり、震災前年のチリ地震の際には大津波警報が発令（３メートルの津波）されたが、結局津波は到達しなかったことから、この震災でも「どうせ津波は来ないだろう」という過信により、このような被害を招いたものだと考えている。 一方で、釜石市内の児童・生徒の多くが無事であった。この事実は『釜石の奇跡』と呼ばれている。なかでも、海からわずか 500ｍ足らずの近距離に位置しているにもかかわらず、釜石市立釜石東中学校と鵜住居（うのすまい）小学校の児童・生徒、約 570 人が、地震発生と同時に全員が迅速に避難し、押し寄せる津波から生き延びることができたことは、積み重ねられてきた防災教育が実を結び、震災発生時に学校にいた児童・生徒全員の命を大津波から守った事実として、大きな反響を呼んだ。 （２）震災当日の実際の様子 私は、「強い揺れのあとには必ず津波が来るから、とにかく逃げろと呼びかけろ」と防災無線経由で何度も指示を出した。しかし、前述のように市民の多くは逃げなかった。あまりの津波の威力に世界一の防波堤も決壊して、町にあるものすべてが流されて、綺麗な海岸も無残な姿になってしまった。(釜石市内海岸部はほぼ全滅状態) 地震直後に役所内に設置した災害対策本部は津波で壊滅状態になったため、別の場所へ移し、自家発電にて緊急会議を行った。避難所も全く同じ状況で寒々しかった。

	自主防災計画や地域防災計画を立てても実際には何の役にも立たなかった。これは計画になかったことが次々と出てきてしまったことによる。例えば、800 体も遺体が出て、それを運んで収容・安置し、火葬まで行なうことになったのだが、誰もこのような状況を想定していなかったため、非常に苦労した。他にも、救援物資が届くのは良いが、それを効率よく、公平に分配するのに想像以上の労力が必要になるなど、想定外の問題が山積した。(災害時には想定外のことが起きることを覚悟する必要がある) （３）さいごに 防災活動のポイントは、事前の取り組みの重要性、これに尽きると思う。私たち釜石市は事前の取り組みが甘かった。防災への危機意識に基づいた事前準備の不足、災害に強いインフラの整備、避難誘導体制の構築、実態に沿った訓練や筋書きのない訓練等々、あらゆる取り組みが不足していた。取り組みの充実のためには、行政だけでなく、住民の意識を変えていくことが必要である。率先して避難をしないと命を助けることはできないので、そういう取り組みを徹底させていくことが必要だと痛感している。平時にしっかりとした防災教育を行い、他市町村や消防、民間企業等との広域での連携や、災害弱者対応への取り組み等を、しっかり行なっていただきたいと切に思う。そして、災害で受けた被害を単なる「経験」にとどめることなく、「歴史」として語りついでいくこと、残していくことが、後世の住民の財産となるはずである。 
開催地より	東日本大震災時に市の職員として、先頭に立ってご対応された語り部の言葉には重みがあり、ひしひしと伝わってきた。行政職員としての対応、災害への備えについて、本当に考えさせられた。本町としては、職員への更なる防災意識の啓発及び訓練を通した知識の習得と、小・中学生への防災教育の充実に取り組んでいく所存である。